

下村観山、小堀鞆音を入れるべきこと。

(四) 図案科は川崎千虎を排して福地復一、大沢三之助の両者に同科の改進を委ねるべきこと。西洋画科の長原孝太郎は図案科へ移すべきこと。

(六) 建築科を設置すべきこと。

(七) 彫刻科を改善し、純美術の奨励とともに工芸方面の彫刻も奨励すべきこと。

(八) 彫金科はその技術の応用範囲拡大につとめるべきこと。

(九) 鍛金科は教員を減らし、真の名手を起用すべきこと。平田宗幸、藤本万作のうち一人だけ残し、新たに山田長三郎を起用すべきこと。

(十) 合金法の進歩に鑑みて金工諸科はこれに十分注意すべきこと。

(四) 普通学科と実習、あるいは各学科間の連絡を緊密にすべきこと。

これらのうち、(一)から(四)までは正木が実施した諸改革の中に対応するものを見出すことができる。(一)について言えば、官立学校としての体制を整備して行ったことがこれと対応する。(二)には大正五年の幹事設置が、(三)には大正三年の「修身」科目設置、同五年の生徒監設置と風紀取締りが対応する。(四)は前述の日本画科改革と大筋において対応する。(五)は後述の図案科改革に一面において対応するもので、福地復一の起用は実現しなかったが、島田佳矣、大沢三之助による新しい体制が出来上がる。(六)は関の指摘をまつまでもなく本校が文部省に要請していた事柄で、正木は鋭意この建築科設置を推

進し、大正十二年に設置が実現する。(七)は、例えば沼田一雅をセーブルに留学させ、陶像を研究させたことなどがこれと対応する。(八) (九)については対応するものを指摘することは困難だが正木がこれを否定した根拠もない。

以上の点から、関の主張は、これが直ちに正木の改革実施を促したとは言えないにせよ、少なからず正木の参考になったと考えられる。ただし、観山、広業起用の提案は、前述のように当時はすでに正木と岡倉の間でこの件についての交渉が始まっていたことから見て、正木にとっては単なる賛同意見にすぎなかっただろう。

⑤ 外国人留学生

本年五月、西洋画撰科第一年に外国人留学生第一号としてアメリカ人女性ジョセフィン・ハイドが入学した。女性の入学者もこれが最初である。彼女の名前は『東京美術学校一覧』（從明治三十四年至明治三十五年）に記されているが、翌年の一覧には記されていないところを見ると短期間の留学であつたらしい。『中央新聞』（明治三十四年五月十八日）はこれを次のように報じている。

米國の貴婦人我が美術學校に學ぶ

日本美術の眞價漸く歐米に知られてより之を規きしやう仍する者太はな多く遙るく海を航して來り學ぶ者さへあるに至りぬ 澳國畫伯オーリリック氏、英國博士ワツキン氏、米國閩秀畫家中にて水彩畫をもて令名あるヘレン・ハイト〔F〕、ヂョセフィン、ハイドの二嬢のごとき或るは帝國大學の聘に依りて法學を講ぜるテリー博士及びその妹

某嬢の如き皆狩野友信翁の門に贅を執りき、ワ氏は既に其の國に歸り今なほ留りて學べる中にはジョセフィン、ハイド嬢尤も熱心にて此に二年餘その進歩いと著るしく見る人舌を捲くばかりなるが狩野派の畫を學ぶにつけても肝要なるは人體の寫生なりとて嚮ききの日その師と仰く友信翁と共に東京美術學校に行きて久保田校長に逢ひ同校の専科生〔講〕たらむことを囑したるに久保田氏も大にその特志に感じて之を許せしかば嬢の悦び噲へん方なく去る十日より日々同校に通ひつゝありといふ 外國の婦人にて日本の美術學校に入りたるは嬢を以て嚆矢とす、扱て嬢は雪舟を享拜することと太だ篤く古今第一の畫聖と稱しその典型に入らむことをのみ努め業成りて本國に歸る上は水墨もて壁畫を〔不明〕□らむと語れる由 嬢にして怠らずむば米國の女雪信〔舟カ〕たることまた難からず 最いとたのもしき話ならずや

ジョセフィン・ハイドに次いで明治三十七年にはやはりアメリカ人女性マリー・イーストレキが西洋画撰科に入学し、同三十八年以降明治期末までの間は毎年二、三名の外國人が入学している。これを國別に見ると清國人が一番多く、次いでアメリカと韓国・朝鮮、インドとシヤムの順となっている。また、科別にみると、全員撰科に入学しており、専攻は西洋画が特別に多く、次いで漆工、日本画、金工、彫刻の順となっている。

朝鮮人留学生の中には西洋画科を首席で卒業し、母國の洋画興隆に貢献した金觀鎬のような人もいゝ。彼は大正五年撰科卒業で、卒業制作「夕ぐれ」と自画像を提出し、九十五点の最高得点で異彩を

放ち、新聞にとり上げられた。

タイ人留学生で明治三十八年金工撰科に入ったチャルン・スラナートと漆工撰科に入ったボンブー・ワナートは母國のキングス・カレッジ卒業後皇后の命令で留学したもので、ともに本校を卒業し、研究科で学んで帰國した。三木栄川の報告（『東京美術学校校友会月報』第十六卷第五号）によればチャルンは帰國後年とともに昇進し、名もピヤ・トワラボディと変わり、貴族階級のうちの第二位に至った。ボンブー（三木は「ボン」と記している。）は皇族出身で中佐相当官として宮内省に勤務している。しかし、ともに本校で習った技術を一度も生かしたことはないという。

⑥ アール・ヌーヴォーと図案革新氣運・図案科改革

パリ万国博覽会を見物した日本の美術家たちが強い衝撃を受けたことは既に述べたが、当時のパリはアール・ヌーヴォーの全盛時代であり、博覽会場にはそうした製品が示威的に展示されていたから、低迷を続けていた自國の図案ないし工芸との対比においてその新鮮さは日本の美術家の心を揺さぶるに十分の迫力を持っていた。それ以前は純粹美術と応用美術を故意に区分し、応用美術を見下していた美術家も図案への関心を強め、彼らが帰國するや明治三十四年頃から各種の図案団体が生まれ、各地で図案の懸賞募集が盛んに行われるようになった。それまでの日本の工芸は、応用美術という語が示すように概ね絵画を工芸図案に應用して精巧なものを作り上げることに終始し、また本校の図案科においては、本来は創造のための古典研究であるべき筈のものが往々にして古典からの借用とな